

佳作

「健診と友人に助けられた命」

橋本 幸子さん

「バリウム飲むの嫌だから、今年もバリウム検査はやめようと思って。」

この私の一言から、すべてが始まった。近所の友人数人と誘い合わせて、町の健診に行った時のことだ。毎年、何事もなく異常なしで終わる健診。私は、小さい頃から大きな病気をしたこともなく、食べることも大好き、人一倍健康そのものを自負していた。まだまだ3人の娘達の子育て真っ最中。いつのように大丈夫に決まっている。しかしその時、私のその言葉を聞いた、一番仲良しの友人の一言が私の大切な命を救ってくれることになる。

「ダメだよー。そう言って、去年の健診の時もバリウム検査しなかったよね。今年はやらなきゃ。」そう言われ、「そうか、じゃあ今年は受けてみるか。」そんな軽い気持ちでバリウム検査を受けた。バリウムを追加され数回飲む。少し不安になったので、健診後に保健師さんに相談した。「人によって、バリウムの流れ具合が違うから、追加で飲む人もいますよ。」とのこと。それなら大丈夫だなと安心して、友人達と帰路につく。健診の結果が悪かった人には、保健師さんが直接家を訪ねて来るんだって。そんな話が出ていた。「そうなんだー。まあ私には、そんなことあるわけないし…。」

健診を受けたことすらすっかり忘れていた数週間後のある日の夕方。ピンポン。「保健師です。」インターホン越しの声にビックリする。保健師さんが、バリウム検査の画像フィルムを私に見せながら、「先日の健診で、胃の入口辺りに大きなこぶが見つかりました。すぐに大きな病院で検査して下さい。今まで、食べ物が飲み込みにくいとか、何か自覚症状はありませんでした

か？」「いいえ、何も。」その画像フィルムは、素人の私にもはっきり分かるほどの不気味なものだった。言われるがまま、大きな病院を受診し、あれよあれよと言う間に、検査、さらに詳しく調べるために検査入院となった。その結果、他にも左肺に小さい腫瘍が見つかった。自分には無縁だと思っていたことが起き、いつもの日常は一変する。とにかく、娘達3人が大きくなるまでは元気でいなければ。その時、一番下の娘はまだ幼稚園の年中さんだった。自分ではどうすることも出来ないこの身体、病院にすべてを委ねるだけだった。

一度の手術で、2人の執刀医により、健診で見つかった、大きくいびつな腫瘍と、検査入院で見つかった小さいが原発だった悪性腫瘍すべてを取り除いてもらった。診ていただいた医師からも、「健診で病気が見つかって本当に良かったね。見つかっていなければ、大変なことになっていましたよ。」と言われた。あの時の友人の一言がなければ、健診を受けていなければ、私はこの世にはもういなかったのだ。

あれから、10年の月日が流れた。私は今も変わらず、元気に生きている。私に一言を言ってくれた、大切な友人に心から感謝していると共に、健診を受けることの大切さを、身をもって痛感している。

自分だけのものではない、大切な命、家族やまわりの人々からも支えられている命、これからも大切にしていきたい。